

今夜7時

市民館 3階

毎週金曜日

みんなで つくろう

みんなの 会館

三人よれば 何とかの知恵

夜間学校

一九八六年初顔合わせなれど 世の中不気味!

山谷争議団 山岡強一氏射殺される

新聞セテレビ・ラジオ、そしてセンターでの朝の情宣活動によつてもうよく知つてゐること鬼が、一月十三日朝六時すぎ、山谷争議団の山岡強一氏(44)が新宿の路上において射殺された。

舗道上を歩いてゐた山岡氏を車の中から双眼鏡で確認し、近づいて来た山岡氏

の前に飛び出し、一メートル前後の距離から短銃を四発、発射して殺したものはだれか。

偶発的なできごとでないことは明らかだ。

一九八三年十一月三日、迷彩服に身を固めた皇誠会員一六名がナチス棒と催涙スプレーで武装し、朝の泪橋において山谷争議団に襲

西成区萩之茶屋5-23
釜ヶ崎解放会館内釜ヶ崎争議団
会館 632-4273

釜ヶ崎夜間学校

在日朝鮮人・韓国人の
指紋押なつ拒否 断固支持。
定住外国人に市民権を

いかつたが、一千名の山谷労働者によつて逆に追ひ散らされた。

それ以後、山谷においては、右翼暴力団西戸組と労働者の闘いが続いていた。

皇誠会とは、天皇さまつりあげ、山谷の環境浄化をうたい文句に結成された右翼団体であるが、その実体は山谷争議団をつぶして手配師からピンハネをしようと狙う暴力団「西戸組」にほかならなかつた。

山谷労働者と共に暴力団飯場と闘い、行政の怠慢を追及する山谷争議団と山谷の

暴力支配によつてピンハネを強めて自らの「トコ」口をふとらさんとした皇誠会の闘い。

この闘いにおいて、山谷の仲間たちがどちらに肩入れするかは、考えたなくてはもめかるだろう。

泊橋に登場した皇誠会が、かつて釜ヶ崎において暴力支配をおこなつてきた「鈴木組」かせ

故山岡同志虐殺糾弾
釜ヶ崎山谷派遣団
帰釜報告集会
本日六時半 市民館
夜間学校も合流します。

ンターにおいて仲間の力によつて料砕されたのと同様に、追いつ散らされたという事実は、山谷争議団と山谷の仲間達が一体のものであることを示した。

右翼団体「皇誠会」として山谷を暴力支配することに失敗した「西戸組」は、一九八四年五月に「山谷互助組合」をデツクあげた。

その規約の第二条には、「山谷互助組合は、組合を通じ相互の発展を願うと共に地域社会に於いては、環境改善を行うことを目的とし、併せて組合員の親睦を計ることとする。」と書かれてい

る。ピンハネをする手配師ごときをまとめようとする組合が、地域の環境改善をいつとき、その二つが、ピンハネの邪魔をする山谷争議団つぶしを意味している

二ことは明らかだ。

会員の特典には、債権、債務、その他相談に協力する事が出来る。」と書かれているのは、賃金不払や労災を三消しなどで山谷争議団と争議状態になったときに、争議に不当介入し、争議つぶしをおこなうと宣言しているの

に他ならぬ。山谷互助組合「結成の動きを知った山谷の仲間達は山谷争議団を中心に、手配師や末端業者をつかまえては、互助組合には加担しないように要求し、確約させる大衆運動を粘り強く続け、「山谷互助組合」を主体の

ないものへとこしていった。「皇誠会」としても「山谷互助組合」としても山谷の地の暴力支配を実現することができなかつた。「西戸組」は、その憎くみを、彼らの敗北とて山谷労働者

の闘いを、映像で記録していった。

佐藤満夫さんに向けて爆発させ、八四年十二月二十二日朝七時、西戸組の筒井が包丁で後から刺し、死にいたらしめた。

佐藤さんの死は山谷の仲間に激しい怒りと闘いをもたらした。「西戸組」はついに「西戸組」としても存立することができなくなり、上部団体の国粋会金町一家の懐の中に逃げ込んでいた。

山谷の闘いは続けられた。しかし、それは、右翼暴力団と同じレベルの、個人へのテロによって決着をつけるというものではなかつた。

佐藤さんの死が山谷を右翼暴力団の支配から守ろうとした闘い、全国寄場労働者解放へあつたこの闘いの中であきたものであり、佐藤さんの無念は、一人二

人の暴力団員を殺してはならぬ

れる程安つ。ほいものではなく、右翼暴力団の存立基盤の解体、寄場労働者の完全解放によってしかはらされるものではなかつたからである。

国粋会金町一家を社会的に滅す闘い。佐藤さんの遺志を引きついで映画の完成、そして上映運動の始まり。

テロにひるまず、大衆の力で追いつめる闘いに、敗北の近いことを予感した国粋会金町一家は、つねに闘いの先頭に立ち、映画の完成にもつとも大きく働き、全国の上映運動展開の起動力を荷つていた

山岡さんを殺すことによつて勝利の幻想を得ようとしたのだ。個人への仲間の死は悼むべきが、しかし、個人が闘争の死を意味したり、個人が闘争を引きおこすのではなく、社会の矛盾が闘争を必然化するのだから、そして、現に仲間の死をのりこえて闘いは続けられて